

# 神々の集う生徒会

生徒会のイケメンたちが神様って本当ですか？

こづかとうり  
狐塚冬里／著

しろみね  
白峰かな／イラスト

ろくねんさんく  
六年三組  
学生会監査

## 有輝 未純

中性的に整った顔立ちと紳士的な振る舞いから、女子のみで構成されるファンクラブが存在する。女神「アルテミス」の名で呼ばれている。

ろくねんじく  
六年二組

## 大和 千代子

平凡な毎日を何よりも愛する読書好きの女の子。争い事は嫌いだが、自分の信念は貫くタイプなのでたまに人とぶつかることも。自分からは口にしないが特異能力がある。

ろくねん にくあ  
六年二組  
せいとがいのくわくかほり  
生徒会副会長

## 百濟 礼助

くんだり  
れいすけ  
倫の右腕的存在の美少年で、名前をもじって「アスクレピオス」のあだ名がつけられている。いつでも温和な笑みを浮かべており、彼が取り乱したところは誰も見たことがないとか。

ろくねんいちくあ  
六年一組  
せいとがいのくわくかほり  
生徒会長

## 安保 倫

あんぼ  
りん  
児童のみならず教員や保護者からも絶大な人気を誇る美少年。その神々しいまでの美しさと名前の音読みから「アポロン」と呼ばれている。カリスマ性に富んでいるが、愛想は非常に悪い。

ろくねんよんくあ  
六年四組  
せいとがいのくわくかほり  
生徒会書記

## 平良 久嶺

たいらい  
ひさね  
気は優しく力持ちを地であり、「ヘラクレス」の名で呼ばれている。体格がいいので中学生と言われた方がしっくりくる、みんなのお兄ちゃん的存在。

おりはら  
まてき  
音楽教師・生徒会顧問

## 織原 舞笛



ひじょうにかんせうせいがかよかてちよつとしたことですぐ泣いてしまう気弱な教師。黙っていれば影のある美青年なのだが、あまり気づかれていない。あだ名は「オルフェウス」。

ろくねんにくあ  
六年二組

## 田所 恵奈



ちよこ  
いちばんともだち  
あか  
おおざ  
きさくな性格で、やや大雑把だが人を見る目がある。

# 目次

## 序幕 / 005

### All men have need of the gods.

すべての人は神を必要としている (古代ギリシャの詩人・ホメロス)

## 第二幕 / 093

### God does not play dice.

神はサイコロを振らない (アルベルト・アインシュタイン)

千代子のギリシャ神話マメ知識 1 / 144

## 第三幕 / 145

### God is a thought who makes crooked all that is straight.

神とは、あらゆるまっすぐなものを曲がらせる思考である (フリードリヒ・ニーチェ)

## 終幕 / 207

### Reason is God's crowning gift to man.

理性は、人間に対する神の最上の恩恵である (古代ギリシャの詩人・ソポクレス)

千代子のギリシャ神話マメ知識 2 / 212

序 幕

**All men have need of the gods.**

すべての人は神を必要としている

(古代ギリシャの詩人・ホメロス)

この世には、子供が近寄らない方がいいものがある。

不審者はもちろん、不機嫌そうな大人にも近づかない方が安全だ。夜の学校にも、近づかない方がいい。幽霊に出会ってしまいかもしれないし、夜に子供だけで出歩くこと自体危ない。

そして何よりも避けるべきは、神乃間小学校の生徒会。

これにだけは、決して近寄ってはならない。一度近づいたら最後、甘い果実の味を知ってしまった人類のように、平穏な日々には二度と戻れなくなるだろう。

「ちよこ、早く早く！ 見えなくなっちゃうよ！」

はしゃぐ恵奈に手を引つ張られながら、千代子はしぶしぶ窓辺に近寄った。

「やっぱり下まで見に行った方がよかったかなあ」

窓枠にもたれながら下を見下ろす恵奈の横に立ち、ちらりと窓の外を見下ろす。けれど、校門から校舎へと続く道の両脇にあふれる児童たちが見えるだけで、他には何も見えなかった。そもそも、恵奈のように背が高ければ楽々と窓枠の上から覗けるだろうが、千代子の中途半端な身長ではそれも難しい。

今年の身体測定では平均身長をどうにか超えたい、という小さな野望を胸に、千代子は見物を諦めて近くの席に座った。

「そこまでして見てどうするの？」

「どうするって……目の保養じゃない。ちょこは見たくなさなの。」

「興味ない」

変なの、と恵奈はまた顔を窓の方へ向ける。その背中にわざと聞こえるように、ため息をついた。

窓に群がっているのは、何も恵奈だけではない。六年二組の児童の半分くらいは、恵奈と同じように熱心に窓から下の道を見下ろしていた。女子と男子の比率は七対三で、女子の方が多い。

そんな団子になってまで見たいものだろうか。見たところで何かご利益があるわけでもないのに。

千代子が自分の席へ戻ろうとした時、きやあ、と女子のはしゃいだ声が上がった。



「来た来た来た！ 来たよ、ちよこ！ 見て見て見て！」

目は窓の下に向けたまま、恵奈の手がぶんぶんと振られる。少しは付き合うべきか、となげなしの社交性を発揮し、千代子も体を四十五度ほど傾けた。その程度では何も見えないだろうなと思つていたけれど、恵奈があけてくれた隙間からわずかに外の様子がうかがえた。

神乃間小学校、生徒会メンバーの入場だ。

通常、小学校に生徒会は存在しない。けれど、児童の自主性を育てるためと銘打って、神乃間小学校では小学校創立当初から生徒会が存在していたらしい。その仕事は幅広く、各種行事から毎日のお昼の放送内容まで、生徒会が取り決めていくという。その権力の大きさと、何かというと表立つて顔を出すこともあり、彼らは非常に目立つ存在となっている。

今朝はその生徒会メンバーが全員そろって登校する、通称『神々の行進』の日だ。

スタート地点である校門からゴール地点の教室までのルート、および各ポイントへの到着時刻、そして見学可能な滞留エリアは、前もって配布されるプリントで発表されていた。毎月のことなのに、全校児童のほぼ全員が毎回この行進のためだけに早めに登校しているというから驚きだ。かく言う千代子も、恵奈に付き合っただけで今日はいつもよりかなり早めに登校している。

敷き詰められた赤レンガのせいもあるだろうけれど、生徒会メンバーが歩くと、ただの道がま



るでレッドカーペットのように見えた。生徒会曰く、この行進は児童との円滑なコミュニケーションを図るため、らしいが、千代子の目にはただのファンサービスにしか見えない。

彼らの通る道の脇には規制ロープが張られているわけでもないのに、レッドカーペットに踏み入る児童はひとりもない。おかげで、千代子からも悠々と歩く生徒会メンバーたちの姿を確認することができた。

「見て、ちよこ！ アポロン様の髪を！ まるで黄金みたい！」

アポロン様、というのは生徒会長を務める安保倫のことだ。そのカリスマ性と容姿端麗さと名前の音読みを無理やりこじつけ、アポロンと呼ばれている。もはやあだ名の方が有名で、本名で呼ぶ人の方が少ない。外国の血が混じっているとか混じっていないとかで、色素が極端に薄いその髪は、朝日を受けてたしかに金に近い色に光って見えた。自信に満ちた瞳はどこか冷たくもあつたが、その作り物めいた様子は絵画のごとき美しさで、『様』をつけたくなる気持ちもわからないではない。絶対に呼ぶ気はないけれど。

「ああ！ アスクレピオス様が私に手を振ってくたさったわ！ 見た!？」

「見てない。向こうも見えてないと思うけど」

千代子の冷めた返答など、恵奈の耳には届かない。

夢中になつて恵奈が手を振り返しているつもりは、生徒会副会長の百濟礼助。生徒会長がアポロンならば、ギリシヤ神話から名前を取つてこよう、とこじつけられたらしい。一応名前からもじっているらしいが、変換が複雑すぎて千代子には覚えられなかった。他の生徒会メンバーも同様に、あだ名はギリシヤ神話の神々の名前からつけられている。

すらりと背が高い礼助は髪に少し癖があり、それが歩きたびにふわふわと揺れるせいか、まとう空気は柔らかい。それに加えて、まるで聖母マリアを思わせる慈愛に満ちた微笑み特徴で、彼が怒ったり泣いたりしているところを見た児童は誰もいないとか。生徒会で何かをする際は、いつも倫の横に立っている。言わば、右腕的存在なのだろう。

近寄りがたい雰囲気の倫に対して、礼助は声をかけやすいと倫に負けず劣らず女子人気が高く、今も教室内には「アスク様——こっち向いて——」といった女子の甲高い声が響いている。どうしてこのクラスでこんなことになるのか、千代子には不思議でならない。

「おい、ヘラクレス様が転びそうになった女子を助けたぞ！ くつ、憧れる……」

どうやら、人混みに押されて転びそうになった女子を、生徒会メンバーのひとりか助けたようだ。まるで美談のように語られているが、そもそも生徒会がパレードなんてしなければ人混みもできはしないのだから、ただ責任を取っただけとも言える。なんてことを言おうものなら、周り

から白い目で見られることは必至なので、何も言わないでおいた。

それに、ヘラクレスの名を持つ生徒会書記の平良久嶺に人徳があるのは、千代子も認める。以前、誰も世話をしていないような荒れ放題の裏庭の花壇を、ひとりでせっせと直しているのを見かけたことがあるのだ。花壇が荒れていることに気づいても、直そうと行動を起こす人はなかない。千代子もそのひとりだったのでなんだかきまりが悪くなり、少しだけ手伝った。関わった時間は短かったけれど、会話の端々に彼の人のよさはにじみ出ていた。先生たちからは問題児と言われているようだが、その理由はわからない。

小学生にしてはかなり背が高く、中学生と言った方がしっくりくる体格をしている彼は、おおらかな性格と面倒見の良さもあって、多くの児童からお兄ちゃんのように慕われている。

「アルテミス様は今日も美しいわ。シャンプーどこの使ってるんだろ。やっぱり美容院で売ってるお高いやつかな?」

恵奈はすっかり陶醉した様子で、窓の下の女神に見入っている。

アルテミスこと、有輝未純は生徒会は生徒会でも監査という特別なポジションについている。生徒会内での不正や、権力の集中化などを防ぐ立場らしい。紅一点ながら、女子ファンの人数は他の三人をも凌ぐ勢いだ。ポニーテールにした艶やかな亜麻色の髪こそ長い、中性的な顔立ち



やすらりとした長身は、時折彼女を美少年のように見せる。その彼女の気品あふれる仕草や紳士的な振る舞いにときめかない女子はいないとか。

「ああ、行っちゃった。もうちょっと見てたかったなあ」

前庭前の人だかりは、生徒会メンバーの行進にぞろぞろとついて行っていた。その人混みは、  
けてから、とほとほとあとをつけていく人影がある。

「ねえ、最後のひとりには注目しないの？」

「最後って……ああ、先生？ 先生は生徒会メンバーじゃないもん」

恵奈の言う通り、生徒会顧問は、正確には生徒会メンバーではないのかもしれない。けれど、  
毎月、月の初めに行われる『神々の行進』のために、顧問の織原もまた駆り出されているのに、  
この扱いの差は気の毒でしかなかった。

織原舞笛は音楽教師だからか、ついたあだ名はオルフェウス。黙っていれば薄幸の美青年なの  
だが、繊細なのか感受性が強すぎるのか、児童のちょっとした発言やさしてすぐもない演奏に  
感動してはすぐ泣き出すので、残念なイケメンと言われている。

時計を見上げれば、まだ八時十五分だった。鑑賞時間、わずか五分。

たった五分のために、通路の場所取りで七時から並び子もいるというから恐ろしい。児童のた  
めの生徒会というのなら、児童が無駄な時間を過ぎさないよう、行進などしなればいいのに。

窓辺に群がっていたクラスメイトたちは、行進の後姿が見えなくなるとパラパラと自分の席  
へと戻っていく。ただ、席につくのは窓際近くの席の子たちだけで、他の子たちはなぜかドア付

近へと集まっていた。その移動に合わせるように、廊下から徐々にざわめきが近づいてくる。そのざわめきは、開いたままの二組の扉の前で絶頂を迎えた。

「おはようございます、アスクレピオス様——！」

長い。呼びかけるには名前が長すぎる。しかしその呼びかけは教室のあちこちから上がっている。そう、アスクレピオスこと百濟礼助は、千代子と同じクラスに所属している。二組の児童に限っては、自分の教室でいくらでも礼助と接する機会があるのに、どうして窓にへばりついてまパレード見学をしていたのか、千代子にはわからない。「ファンとはそういうものだよ」と恵奈に言われたけれど、わからないものはわからない。

騒ぎの中心である礼助がクラスメイトたちに微笑みを返しながら歩いてくる。この人はきつと、前世では高貴な生まれだったに違いない。王様たとか王子様たとか、そんな気品と落ち着きが彼の周りには漂っている。何にせよ、自分とは縁遠い人だなと他人事とばかりに顔を逸らしたところに、ソフトボイスが聞こえた。

「おはよう、大和さん。そこ、いいかな」

礼助の視線を受けて気づく。思っていたよりも、瞳の色が薄い。黒より茶色味の強いそれは、どこかミステリアスに見えた。毎日教室で顔は見ているけれど、こんなにじっくり見たのは初め

てだった。

「大和さん？」といぶかしむような声に、ハッと自分が立っている場所を確認する。窓に近いからと適当に陣取っていたが、まさか礼助の席の真横だったとは。どうりで、他の子がここだけスペースを空けていたわけだ。その誰もが遠慮をする最高のスポットに、気づいていなかったとはいえ堂々と居座っていたのはさすがに恥ずかしい。

「ごめんなさい。気がつかなくて」

急いで脇へ避けた千代子に、礼助はにこりと笑いかける。

「ありがとう。実は今日、宿題が終わってなくて」

見えないビームにでも打たれたかのように、足がよろめく。美形の笑顔は威力がすごい。千代子が後ろに下がると、待っていたかのようにクラスメイトたちが礼助の席に群がった。

「宿題だったら私のを写してください！」

「私も！ 私もアスク様のために宿題やってあります！」

「女子のノートよりこは男子のたる！ ほら、見てもいいぞー」

男女入り混じったセールスポイントにはいろいろ突っ込みたいことはあったが、口にチャックで千代子は教卓前の自分の席へと足を向ける。

「みんなありがとう。でも宿題は自分でやるべきだし、自分のためにならないからね」

椅子を引きながら、礼助の至つてまともな返答を聞いた。クラスメイトたちは「ほう」と感嘆の吐息をもらしていたが、千代子はひとり冷めた吐息をつく。

——でも宿題は（自分で解いた方が早いから）自分で解くべきだし、（みんなの解答は間違っている可能性が高いから写したりしたら）自分の（成績の）ためにならないからね。

春の日差しのような柔らかい声からも、聖人君子そのものの笑顔からも、こんな捻くれた返答はうかがえない。それなのに、なぜか千代子にはこう聞こえてしまふ。一度恵奈に意見を求めたこともあるが、その時は熱があるのかと心配されたほどだった。

「今日もアスク様の人気はすごいね」

ようやく窓際から戻ってきた恵奈が脇に立ち、引いたばかりの千代子の椅子を、再び机へと押し戻す。どうやらおとなしく座らせてくれる気はなさそうだ。

「今日も?」

「今日も! お願いい!」

手を合わされ、仕方なくうなずいた。なんだかんだ言っても千代子が付き合つたろうことは、恵奈にもわかつているのだろう。恵奈はすでに廊下に向かって歩き出していった。



四月のクラス替えからここ一ヶ月、恵奈が毎日続けていること。それがこの……。

「見えた？」

「……ばっちり。はあ、今日も素敵……」

隣のクラスの覗きである。

隣のクラスである六年一組のドア付近には、いつも多かれ少なかれ一人だけだかりができていた。なぜなら、一組にはアポロンこと安保倫が在籍しているからだ。群がる大半の児童のお目当ては我らが生徒会長様だったが、その人影を利用して覗きに勤しむ恵奈のターゲットは、千代子と同じく教卓前の席を割り当てられた小柄な男の子だった。

「たまには後ろからじゃなくて前から見た方が……」

「そんなことしたら見るのがバレちゃうじゃない！」

「いやバレないでしょ。みんな違う人見てるんだと思うよ……」

誰も、安保以外を見ているなんて思わないだろう。ごくありふれた教室の中ですら、倫は後光でも差しているかのように目立っているのだから。おそらく、本人ですら人たかりの人々は全員、自分を見ているものだと思っているに違いない。

「後ろ姿もかわいいからいいの」

千代子も一組の教室を覗いてみたが、恵奈のお目当ての相手は、後頭部がたまに見えるくらいだった。そのマッシュルームカットの頭は見事な丸みを帯びている。

「……そんなに好きなら、声をかけたらいいのに」

廊下ですれ違った時に挨拶するくらいなら、隣のクラスの子だろうとそこまでおかしくもない。けれど、恵奈は顔を真っ赤にして首を横に振った。生徒会の行進を見ている時は、キャーキャー言いながらもこんな顔はしていなかった。恋心とファン心理はやはり違うものらしい。

「どこが好きなの？」

千代子はまだ、恋をしたことがない。だから、恵奈がこうして足繁く隣のクラスに通う気持ちもわからない。

「ど、どごとって、そりゃあ……」

てっきり、『全部』とでも言われるかと思っただけ、違った。

「いい？ 粕谷くんのいいところは顔よ、顔。とにかく顔がかわいい。あのさらさらマッシュルームカットも、赤ちゃんみたいなくawaii顔があつてのことなの。背が小さいところもチャーミングポイントだよ。背の順で並ぶと一番前だから、前ならえがアレなの。最高でしょう？」「

真面目な顔で言うことじゃない。要するに、恵奈は粕谷の容姿が好きらしい。それでいて生徒

会メンパーたちに対する気持ちとも違うというのだから、乙女心は謎すぎる。

毎日のことなので、千代子もさすがに粕谷の顔はもう覚えていた。恵奈の言う通り、粕谷はかわいらしい見た目をしていると思う。あまり口数は多くないようだったが、女子からも男子からも人気があるようで、いつも周りに友達がいた。さらに意外なことに、どうやら粕谷はクラス内でみんなから頼られるポジションのようだった。マスコットキャラクター的な扱いを受けているのでは、と勝手に思い込んでいた自分が恥ずかしい。顔がかわいいから好きだと豪語してはいるが、恵奈の方がよっぽど見る目がある。

「決めた」

ふいに声がしたかと思うと、ぐいっと引き寄せられてよろめいた。恵奈は頭ひとつ分も低い千代子の肩に両手を乗せ、真剣な顔で見下ろしてくる。身長差だけでない圧を感じ、思わず目を逸らした。嫌な予感がある。

「お願い、ちよこ！ 放課後の抽選会付き合って！」

無理。ごめん。勘弁して。即座に断りかけたけれ



ど、声にはならなかった。親友にすぎるような目で見つめられては、千代子も断れない。

「一緒に並ぶだけだよ」

そう言いながらも、並ぶだけではすまないだろう、という予感があった。

クラス替えのあと、二組でよかったと思つたことは二回ある。

一度目は、毎朝隣の一組にアポロン詣での行列ができていたのを見た時。毎朝あの列に並ばないと教室に入れないのはつらい。そして二回目は、今日だ。

「大和さんが一番だね」

礼助に柔らかい笑顔を向けられ、やや引きつった顔でうなずきながら、「田所恵奈の代理です」と代理を強調した。その千代子の後ろには、終わりの見えない列ができていた。

恵奈が言っていた抽選会とは、毎月七日に行われる『神託の日』の神託権なるものを得るためのものだ。神託なんて大げさな名前がついてはいるが、なんてことはない。ただ、アポロンこと倫に占ってもらつた権利を抽選で決めるだけだ。

この占いがとにかく当たるというので、学校中の児童のみならず先生たちまで抽選会に並ぶほどの大人気行事となっている。こんなに並んでいるにもかかわらず、当たり前、つまり占ってもら

えるのは月に七名のみで、その倍率は約八十倍になるとか。一度占ってもらった人も何度でも参加できるのです、その倍率が低くなることはない。宝くじの一等に当たるよりは確率が高いけれど、在学中に当たりを引き当てる確率はかなり低い。

とはいえ、くじを引かないことには当たりもしない。抽選会は生徒会副会長である礼助の仕事であり、場所は二組の礼助の席。おかげで、帰りの会の終了のチャイムと同時にスライディングした恵奈が、一番最初にくじを引く権利を得ることができたというわけだ。二組在籍でなければ使えない技だ。

一番になったので約束していた『並ぶ』必要はなくなったけれど、肝心のくじ引きは千代子がやるはめになってしまった。「一番に並ぶためにと飛び出した恵奈は、机に派手に衝突し、保健室へ行っている。」

「さて、準備はいい？ くじを引けるのは一度だけ。引いた棒の先が赤ければ当たりだよ」  
はい、と差し出されたのは、筒状の入れ物だった。小さな穴が一箇所だけ空いていて、そこから棒が出る仕組みになっているようだ。てっきり箱の中から折った紙を引くタイプのくじだと思っていたので「瞬手が止まる。それに気づいたように、礼助が口を開く。」

「資源と労力は大切にしなきゃね」